經濟論叢

第117巻　第5·6号

哀　　辞
故岸本英太郎教授遺影および原稿
社会・技術システム論の発展と
作業組織の再編成……赤　岡　　功　1
合衆国の大規模農場経営の位置と
その階級的性格(1)……中　野　一　新　20
日本帝国主義下の中国北部占領地域開発の
「統合調整」と北支那開発株式会社……鈴　木　　茂　46
価値と分配について……岡　本　義　行　72
「不変資本充用上の節約」の位置と構成……吉　田　文　和　92
ホッブズ社会哲学形成史における「歴史」の意味……田　中　秀　夫　112
記　　事
岸本教授逝く
追　憶　談（渡部 徹・向井喜典・長谷川雅哉）
故岸本英太郎教授略歴・著作目録

昭和51年5·6月

京都大學經濟學會

追 憶 談

岸本さんの人がら

渡 部 徹

立派な先輩・友人が大ぜいおられますのに，私が友人代表として追悼のことばを申述べますことは大変おこがましいと思うのですが，御指名いただきましたとき，あえてお引受けいたしましたのは，私にとって岸本さんは，最も敬愛する先輩であり，30年近いおつきあいの中で，気まづい思いをいたしたことは一度もなく，終始お引立てをいただいて参りましたので，お別れにあたって，お礼とお詫びを申上げたいということで，僭越をかえりみずお引受けした次第でございますので，お許しいただきたいと存じます。

岸本さんは，私にとっては高等学校以来の先輩で，専攻の学問分野が全く同じでございましたので，ずいぶん議論しあって参りました。というより岸本さんの議論をおうかがいするという方が適切でありましょう。

岸本さんの研究業績については，すでに弔辞の中でおふれになりましたので，省略させていただき，私のみた，岸本さんのお人柄について，申上げたいと思います。

岸本さんは，本当に研究熱心で，議論好きな方でございました。それについてこんな

思い出がございます。

それは，岸本さんの最初の著作『日本労働政策小史』（1948年6月刊）をお出しになった直後のある日でしたが，小山弘健さんに会いたいといわれるので，私が京都から御一緒に大阪・池田市の小山さんのお宅へ御案内したのでありますが，議論は行きの電車の中からはじまり，小山さんのお宅でも，さらに小山さんのお宅からの帰り道，電車の中とつづきます。当時私は池田から遠くない豊中に住んでいましたから，そこにはすぐ着いてしまうのですが，岸本さんとの話がつづきますので，十三まで御一緒しました。もう夜も相当遅かったのですが，十三の駅でも話はつづき，岸本さんは京都線の電車を1台乗りすごしてまで，議論をつづけられる，それほど議論好きな方でした。住谷先生の弔辞にもございましたように，岸本さんは大変，早口で，同じ時間で，私の倍位しゃべられるのですから大変なものです。

このときの小山さんのところでの議論で，お2人は意気投合され，以後，お2人の共同の著作が多く出されるようになったわけであります。

舌鋒鋭い岸本さんの議論については，1956年か57年ころであったかと思いますが，岸本さん，井上清さん，小山弘健さん，私の4人が，月に1回，寺町二条の三月書房の2階で，井上さんの『日本近代史』の合評会を長くつづけたことがありましたが，岸本さんが舌鋒鋭く井上さんを批判され，さすがの井上さんもタジタジということがしばしばございまして，井上さんが私にあの会はシンドイなーとこぼされるほどでございました。

その半面，この会の終わったあと，時に飲みに出かけることもありましたが，われわれは呑み助ですが，岸本さんはお酒を全くお飲みにならないのですが，それでもわれわれにつき合われて，夜明けまで御一緒されるという，人なつっこい一面もございました。

私は岸本さんと御一緒で，ずいぶん沢山の会合に参りましたが，岸本さんと御一緒なら，初対面の方との会合でも，席につくや否や，岸本さんがすぐ議論をはじめられるので，つき合いの悪い私などは，気を使わなくてすんで大変助かった思いをいたしました。

いま思い出してみましても，岸本さんとはずいぶん多く話合って参りましたのに，岸本さんの健康のことについて話合ったことはあっても，そのほかには，職場のことも，家庭のことも，私は何一つお聞きした覚えがございません。それほど，議論好き，研究熱心な方でございました。

1970年代になると，健康を害され，訪ねて見えることもほとんどございませんでしたが，それでも情熱は失っておられず，体が悪くて思うように研究できなくて残念だ，君が羨ましいと，電話でしばしば申され，お見舞に参らねばと思いながらも，何だか申訳けない，心苦しい思いがいたしまして，失礼をつづけて参りました。昨年，岸本さんの還暦記念論文集が出されますとき，私も拙い一文をよせましたのに対し，すぐ丁重なお

礼の手紙――岸本さんは，よくもあんなにこまかい字が書けるものだと思うほど，こまかい字を書かれますが，そのこまかい字で，ぎっしり書かれた中に，還暦記念になればいいが，追悼集になりはしないか，といった文面がございました。そんなにお体が御不安なのかと驚き，お見舞に伺わねばと，大変気がかりになっていながら，果せないでいますうちに，突然の訃報を知らされ，大きな心残りとなりました。長い間の御厚情に厚くお礼を申上げ，お別れを告げたいと存じます。